

## 高校献血減少の要因分析

## 1. 高校での集団献血実施状況の変化(参考1)

### (1) 内部要因

#### ■ 400mL 献血由来製剤の需要増加に伴う高校献血の抑制

- ・医療機関からの 400mL 献血由来製剤の需要増加に伴い、また血液在庫の有効期間を考慮した 200mL 献血の抑制。
- ・200mL 献血の抑制が学校側に伝わり、以前に比べると担当教諭との連携が薄れてきている(情報の伝達不足)。
- ・大学の方が 400mL 献血の協力が得られ、また献血バス 1 稼働当りの献血量が多いことから、高校献血を抑制している。

#### ■ 高校行事(文化祭等)における献血の実施体制

- ・400mL 献血可能者を対象に実施しているため、一部の生徒しか対象にならず全校的な取り組みが行えないことから実施に至らない。
- ・学校側や実行委員会等からの要望はあるものの、実際には生徒の献血協力時間が取れず、来場者(保護者等)主体の献血となり、協力者も十分に確保できないことから実施に至らない。
- ・開催時期が複数校で同一日の場合(秋季、土・日曜日等)が少なく、献血を実施するうえで、一律の対応が困難な場合がある。

#### ■ 採血副作用発生による安全性確保への懸念

- ・採血副作用が発生してから、献血を実施しなくなった高校もある。

### (能動的な取組み)

・学校へ出向いての献血セミナーの展開	・当該セミナー実施後、集団献血の実施に結び付けていきたい。 ・授業のカリキュラム(奉仕、総合的な学習)の導入をきっかけにボランティア活動への積極的参加を促す。
・400mL 献血への理解	・学校側からの要請に基づき調整を行っているが、献血の実施については原則 400mL 献血への理解を頂いている。 ・400mL 献血の推進もあり、3 年生を対象に卒業献血を実施している。 ・本年 4 月の採血基準の一部改正(17 歳男性の 400mL 献血)を踏まえて、各高校へアプローチしている。
・安全性確保への配慮	・10 名/時間の献血申込受付という条件について、事前に経緯等を説明し、理解していただくよう推進した。下校時間の遅れや副作用等への対応を考慮していることから、学校側からは高評である(行政からの推進も要因)。
・行政との連携	・県の献血推進計画で“将来に向けた普及・啓蒙促進”のために高校献血を強く推奨しており、県・市町村・血液センターの 3 者で定期的に学校訪問している。

## (2) 外部要因

### ■ 学校側(養護教員等)の理解

- ・学校方針の変更(人事異動・高校の統廃合等)により献血の受入れを拒否される場合がある。中でも養護教員の献血への理解が得られない場合が多い。

\*献血未実施校から献血実施校に異動した場合、献血の受入れに理解をいただけない場合が少なくない。

\*近年、ライオンズクラブの方々からも高校献血の推進に協力いただいているが、献血の安全性、特に 400mL 献血についての理解が得られにくいことから、献血の実施に至るケースは少ない。一方で、養護教員からの紹介により、これまで献血を実施していなかった高校(文化祭)での実施が可能となったケースもある。

### ■ 授業のカリキュラム上等の問題

- ・授業のカリキュラムが過密のために授業時間中の献血実施が困難である。また、献血の実施日や時間の制約があることから、学校との調整が難しくなっている(平日の限られた時間帯, 土日・祝日, 季節等々)。
- ・週休 2 日制のため土曜日の授業が平日に移行しており、放課後の献血ができなくなった(以前は多数の高校で実施)。

### ■ 採血副作用発生による安全性確保への懸念

- ・VVR 発生時の安全性の確保や責任問題(保護者の同意)等により、献血協力が積極的にならなくなってきた。
- ・養護教員や学校保護者会等から、成長期にある生徒からの採血は望ましくないとの意見があり、なかなか理解が得られない。

### ■ 行政の考え方

- ・行政側が高校生の献血に対して積極的ではなく、結果的に高校献血が減少してきている。

### ■ その他

- ・事前に献血希望者を募っているが、最近では生徒自身の献血への関心の薄れから、献血協力者の減少が目立つ。また、放課後に実施している学校においても、同様の傾向が見られる。

## 2. 高校での集団献血を推進することにより予想される課題(解決するための方策等)

### (1) 内部的課題

#### ■ 献血量確保上の問題

- ・医療機関からの 400mL 献血由来製剤の必要量への対応(200mL 献血由来製剤の需要と供給のバランス)。\*献血バス一稼働当りの献血量の減少。  
\*200mL 献血由来製剤の在庫量が医療機関からの需要量を超えた場合の期限切れ減損の懸念。
- ・本年 4 月より 17 歳男性の 400mL 献血が可能となったことも踏まえ、献血者の安全性と安全な輸血用血液の安定的な確保の必要性を丁寧に説明し、十分な理解を得るために、学校側との円滑な情報交換を行うことが重要である。
- ・集団献血実施だけの推進でなく、献血も含めた血液事業全体の情報を伝えていく事業を積極的に展開する必要がある(生徒だけでなく、特に若い教員へも理解を求める)。

#### ■ 献血を実施するうえでの問題

- ・学校側の要望(献血実施の時期や時間等)に対する血液センター側の実施体制。

### (2) 外部的課題

#### ■ 学校側(養護教員等)の理解

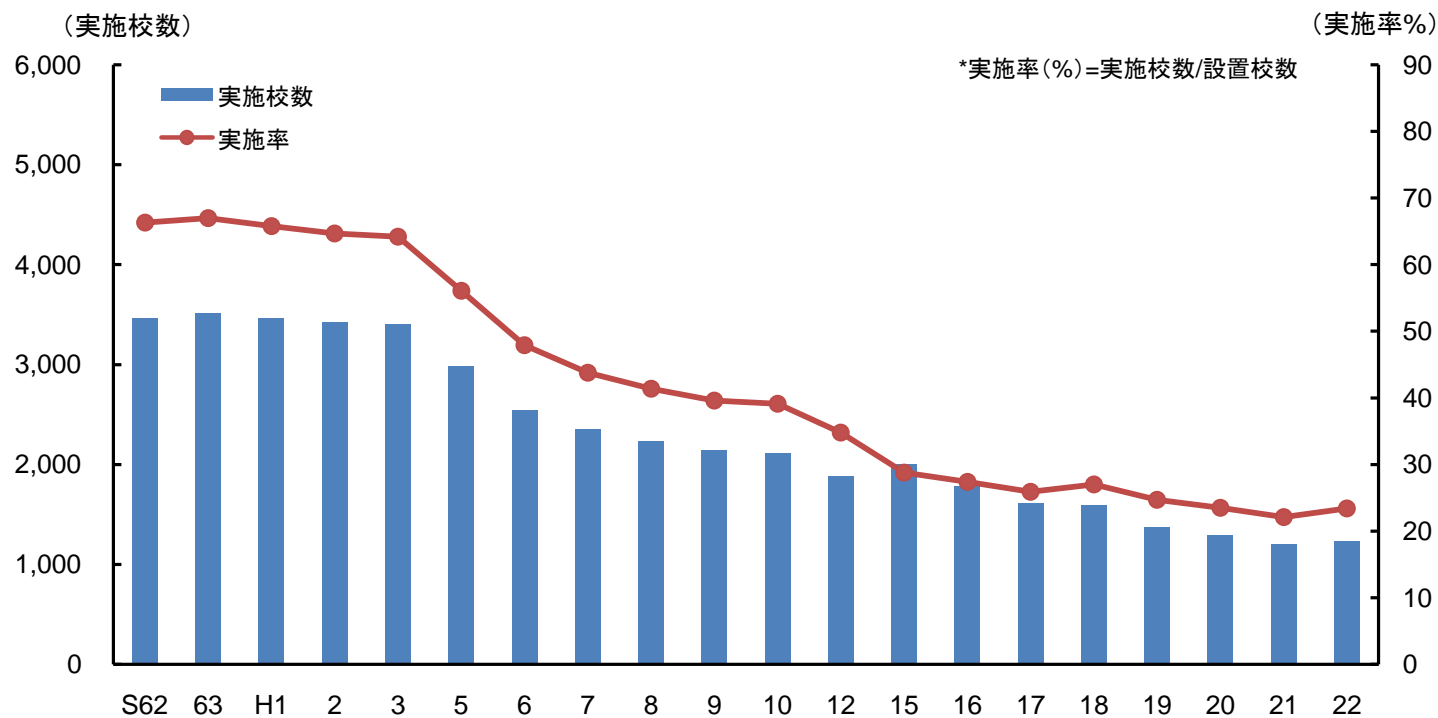
- ・国公立を含めた校長会や養護教員等の集う場所などで、献血の重要性を取り上げてもらう体制の構築。
- ・献血をはじめとしたボランティア教育の授業への導入等、生徒への献血の重要性を知る機会を設けるなどの教育方針が重要である。
- ・安心や安全を含めて、養護教員や保護者等の献血への理解が得られる環境作りが必要である(重篤な VVR 発生時の責任の所在等)。\*保護者の同意書がなければ献血へ参加できない高校が多い。  
\*高校献血の実施が強制化という意識(献血は自由意志)。

#### ■ 行政の理解

- ・献血を実施していない学校関係者の理解を得るためには、献血推進を担う行政との円滑な連携を図りつつ、高校献血に積極的に関わってもらえる体制を構築する必要がある。
- ・厚生労働省から文部科学省への働きかけ、また文部科学省から各都道府県教育委員会への働きかけが必要である。

(参考 1)

### 高校献血の実施状況(年度別)



\*昭和 60 年, 61 年度および平成 4 年, 11 年, 13 年, 14 年度は、厚生労働省を通じて全日本教職員組合養護教員部からの調査依頼に基づいて調査・報告しているため調査未実施

(参考 2)

高校献血実施への主な取組み

(平成 22 年度)

No.	血液センター名	取組みの概要
1	茨城	<ul style="list-style-type: none"> <li>・JRC(青少年赤十字)加盟校での事前広報を行った(1校44名増加)。</li> <li>・献血セミナー実施後、献血の実施(1校23名増加)。</li> <li>・渉外職員による学校への働きかけによる献血受付時間の見直し(半日から終日実施へ)を行った(1校56名増加)。</li> </ul>
2	山梨	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで3年生を対象として実施してきた学校が、22年度より新たに2年生も対象としていただいた(4校250名増加)。</li> </ul>
3	静岡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・21年度には400mL献血を推進したが、承諾いただけず14校の減。22年度に再度、学校担当者へ申し入れ、献血協力の理解が得られた。また、献血休止中の学校も再開し、合わせて前年度より12校増加の90校から協力を得る。</li> </ul>
4	和歌山	<ul style="list-style-type: none"> <li>・県の献血推進担当者やライオンズクラブからの働きかけにより、22年度にはこれまでの年間2回の献血実施校1校に加え、新規の献血実施校が2校、</li> </ul>
5	愛媛	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若年層献血を推進するにあたり、渉外職員が各高校の校長先生や教職員(献血担当者)を訪問し、献血へのご理解とご協力を得ることができた(対前年度より14校増加)。</li> </ul>
6	宮崎	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若年層献血推進も含めた広報活動の強化を行っている(CMやお天気予報フィラー)。</li> <li>・渉外職員が県内各地の高校(献血担当者)を訪問し、若年層の献血推進に対する理解と協力を求めた。</li> <li>・献血実施時には、学校側(クラス担任)より積極的な呼びかけを行っていただいた。</li> <li>・口蹄疫の発生により、献血への関心が高まり、各学校から献血に協力したい旨の依頼があり、実施した(3校増加)。</li> </ul>